
召喚師

S

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚師

【Nコード】

N1954Y

【作者名】

S

【あらすじ】

惑星エールは創造神ニステイによって命に満ち溢れていた。ある時破壊神カルマによって滅ばされ欠けたが、大戦の結果カルマは消滅し、ニステイは様々な生命・力を残したままいつさめるかも分からない、深い眠りについた。その後2000年以上の時が過ぎ、ニステイが残した力によって独自に発展していった。再生暦2050年そんな中、ある海岸で倒れていた男の子が見つかった。

メイン人物紹介（前書き）

初投稿です。 つたない文章ですが読んで貰えれば幸いです。 R15、残酷な描写ありにしていますが、展開をまだ考えている途中なので書くかは分かりません。 不定期に更新していく予定です。 よろしくお願いします。

メイン人物紹介

人物紹介

レイン＝スレイブ 16歳

5歳の時、レイン海岸で倒れているところをウィン国王女のカナリアとルーナに助けられる。目覚めたとき記憶がまったく無く、王家の剣と言われるスレイブ家の養子となる。

レインの召喚獣－精霊王”フィル”－

魔力を糧に様々な力を人に貸す精霊達の王。七色の髪を持つ美しい女性の姿をしている。

カナリア＝コーラル 17歳

ウィン国第一王女。父親譲りの真紅の髪を持ち、男勝りな勝ち気な性格。闘仙術を学んでいる為動きやすさを重視して髪をショートカットにしている。

カナリアの召喚獣－赤龍”グレン”－

灼熱の炎を吐く中級のドラゴン。老練した性格で、召喚者であるカナリアのことを優しく見守っている。

ルーナ＝コーラル 16歳

ウィン国第二王女。母親譲りの美しい銀髪を背中までストレートに伸ばしている。普段は穏やかな性格ではあるがたまに頑固になることがある。頭脳明晰であり読書が好きなため知識が豊富。

ルーナの召喚獣－天龍”ウィズ”－

風を操る中級のドラゴン。話し方は小さい女の子だが、常に冷静沈着でルーナのよき相談相手。

ユリ＝エルフィン 17歳

レイン・カナリア・ルーナの幼なじみのエルフ。腰まで伸ばしたウェーブがかかった金髪が特徴で、若干天然なところがあり3人のお姉さん役をしているためか、3人に対して抱きつき癖がある。

ユリの召喚獣－魔狼”フェンリル”－

絶対零度の吹雪を吐く狼。無口だが意思表示はしっかりしており、ユリからリルちゃんと呼ばれる度、苦笑いをしている。

プロローグ1

ーレイン海岸ー

カナリアとルーナは兄のカイル「ウィン」コーラルと共に王家のプライベートビーチであるレイン海岸に来ていた。

両親が公務で忙しい為、今年15歳になる兄に連れてきて貰ったのだった。

一通り遊んで疲れたため、カイルとカナリアが休んでいると散歩しに行ったルーナが慌てて走ってきた。

「どうした」

カイルが訊ねると、

「ひ、人が倒れているんです」

ルーナの案内で急いで行くと、黒髪の男の子が倒れていた。

ーコーラル城ー

「ここは・・・」

僕は気がつくやうに広い部屋のベッドで横になっていた。

「気がついた？」

「あ、うん」

「よかったです」

頭を動かして隣を見ると2人の女の子が心配そうにみていた。

「此処はコーラル城の客室です。あなたは海岸で倒れていたんですよ。」

「王家のプライベートビーチであるレイン海岸だね」

「えっ、じゃあ君達は」

「はい、私はウイン国第二王女ルーナ」コーラルです」

「私はカナリア」コーラル第一王女よ。あなたは？何であんなところ倒れていたの？」

銀髪の子がルーナ、紅髪の子がカナリアという名前らしい。

カナリアの問いに答えるべく考えてみる・・・

「分からない・・・」

「「は？（え？）。」」

「なぜ倒れていたのか、自分の名前すら出てこないんだ。」

プロローグ1（後書き）

次の話でユリが出てきます。

プロローグ2

ーコーラル城・謁見の間ー

3人は侍女に連れられ謁見の間にやってきた。

そこには国王のゲイルⅡウインⅡコーラルと妻のルナティア、カイルを中心に、右側に王家の剣と言われるスレイブ家の当主カタールⅡスレイブと前当主夫妻ウルスとサクラ、左側に王家の盾と言われるアイギス家の当主イージスⅡアイギス、王家の知と言われるエルフィン家当主リツカⅡエルフィンと娘のユリがいた。

「それではなにも覚えていないのだな？」

ゲイルに問われ「はい」と答えた。

「まずは名前が無くては不便だな…レインでどうだろう？」

僕は頷いた。

「では、本当の名を思いだすまではレインと名乗るといいだろう。それで、これからのことなのだが…」

「陛下、彼の魔力値が出ました。2500万です。」

「なっ」驚き声にならない一同。

「ウイン国随一の魔力を持つサクラ様、リツカ様でも1200万程度です。召喚獣無しで倍以上の魔力を持っています。信じられませんか。」

呆然とする一同の中ウルスが発言した。

「陛下、彼をルーナ様のガーディアンにしてみても如何でしょう？彼は私達夫婦が引き取って育てますゆえ。」

「なっ、何を言い出すんですか父上は！ルーナ様のガーディアンは私の息子のククリだったはずです。」

驚き、怒りを表すカタール。

「だが最近ルーナ様のガーディアンに選ばれて天狗になり、怠けているところがあるがあるだろう。だから儂等が育て、ククリと競

わせればよい。レインもそれでよいかの？」

「僕はカナリアとルーナに助けて貰いましたから、恩返しがいのです。」

「では、決まりじやの。皆もそれでよいかの？」

レインはウルス夫妻の養子となり、ルーナのガーディアンとなる為の訓練をする事になった。

ーコーラル城・客室ー

カナリアとルーナに言われ、今夜はコーラル城に泊まることになったレイン。レインが横になっていると、カナリア、ルーナ、ユリの3人が部屋に入ってきた。

「ユリ」エルフィンです。よろしくね」

そう言うとき突然レインに抱きつくユリ。レインが困惑していると、

「あゝ、ユリに気に入られちゃったのね。ユリは気に入った物に抱きつく癖があるのよ」

呆れ顔で説明するカナリア。

「ちなみにユリさんは魔法が得意で姉さんのガーディアンでもあるんです。」

「そうなの。これからガーディアン同士仲良くしようね。」

4人で他愛ない話をしながらこの日の夜は更けていった。

ースレイブ宅・離れー

「今日からレインには僕等と此処に住んで貰う。剣技は僕が魔法や一般常識等はサクラが教えることになる。始めに言っておくが僕等は厳しいぞ。」

「はい。これからよろしくお願いします。」

こうしてレインの日々は始まった。

プロローグ2（後書き）

プロローグはこれで終了です。次から本編を進めていきます。

入学試験

「アルカナ学園」

アルカナ学園はウイン国最高峰の魔法学園である。広大な敷地面積を持ち、高い魔力を持つ者しか入れない。だがアルカナ学園の尤も特殊なところは召喚獣を国で唯一授けられるところにある。

本来生まれ持った魔力は増えることはない。だが召喚獣を得ることとで魔力は増え、そして生涯のパートナーとなる。

そのためには召喚獣に自分を主と認めさせる必要があるため、入学の最終試験として適正試験で召喚獣を従えることが入学の証となる。

その試験会場には入学を目指す者が200人以上おり、その中にはレインとルーナ、そしてククリがいた。

会場の壇上には10人中9人は振り向くような若い女性が立っていた。

「それでは入学最終試験を開始する。私はアルカナ学園、学園長アビスIIアルカナだ。1人づつ召喚石に触れ召喚の間において召喚獣と契約せよ。契約を以てアルカナ学園入学とする。」

入学試験（後書き）

次回レイン、ルーナ、ククリが召喚獣と契約します。

入学試験2

10人づつ召喚石のある部屋に入っていく。

レインとルーナは学園長に連れられ、部屋に入った。

「試験について詳しく説明する。1人づつ召喚石に魔力を流してもらい召喚の間において召喚獣と契約をすれば合格だ。召喚の間は時間軸が違ったため、どれだけいてもこちらの時間で1分で出てくることになる。契約を得た者はこの場に残り、得られなかった者はお帰り願おう。では名を呼ばれたら魔力を流せ。」

説明が終わるとククリがルーナに声を掛けてきた。

「ルーナ様お久しぶりでございます。このククリスレイブ必ずや召喚獣と契約し、ルーナ様のガーディアンとしての使命を果たしてみせます。あのような偽物などにガーディアンが務まるはずがありません。」

「え、ええ…」ルーナが困惑気味に答えるとククリの名前が呼ばれた。

「相変わらずですねククリは」

「ええ、あれがなければいい人なだけだね。」

レインとルーナが苦笑いを浮かべながら話しているとククリが契約の証として腰に赤い剣を携えながら戻ってきた。

「ルーナ様、ククリスレイブ契約完了し戻って参りました。」

「おめでとう」レインがそう言う、とククリは勝ち誇るようにして

「ふん、当たり前だ！貴様とは格が違うからな。俺が契約したのは中級でも上位の炎虎だ魔力を50万しか持たない貴様では下級召喚獣が精々だろう。」と言い放った。

ルーナが訝しんでいるとルーナの名前が呼ばれた。

「それでは行ってきますね。」

「ルーナ様頑張ってください。ルーナ様なら必ずや召喚獣と契約出来ます。」

「うん。いつてらっしゃい。」

レインにだけ頷くとルーナは召喚石に魔力を流した。

入学試験2（後書き）

召喚獣の契約方法とククリの初絡みで終わってしまいました。次の話でレインとルーナが契約します。

契約（前書き）

若干エツちなシーンとコメディシーンを入れてみました。感想あれば是非コメント下さい。

契約

「召喚の間・ルーナside」

ルーナは真つ白な部屋の真ん中に立っていた。回りを見回していると背後から声を掛けられる。

「お姉さん」

驚いて後ろを振り向くと淡い光を放つ白い龍がいた。

「あなたが召喚獣？」

「そう、私は天龍。名前はお姉さんと契約したら教えるね。さて、お姉さん。」

「はい。」

「お姉さんは何のために召喚獣を、力を求めるの？」

「えっ。」

「この世界は召喚獣と契約しないと魔法が使えないことをお姉さんは知っているでしょ。魔法は私達が居てやっと制御出来る。だから私達は主となる人の真意を知ることがとっても重要な事なんだよ。」

「そうなんですか……。私は、人を助ける為に力が欲しいです。私の力が及ばず、助けられない事が無いように。」

「傲慢だね。」

「えっ？」

「それに他にも理由は在りそうだけど、それも本心の一つか……。いいよっ。契約してあげる。」

「本当ですか？」

「お姉さんの事気に入ったしね。」

「では、よろしく願います。」

「うん、よろしく。私の名前はウィズ、天龍ウィズだよ。」

「私はルーナ」コーラルと申します。」

『では、天龍ウイズの名においてルーナ「コーラルと契約を結び、契約の証として天杖・エアグルーヴを授ける。」』

「ありがとうございます。」

『じゃあ改めてよろしくね、お姉さん。あと敬語はいらないから。』

「私の事は、ルーナと呼んでね。ウイズ。」

『うん。じゃあ元居た場所に戻すよ。召喚の間から出たら半日位で顕現化出来るから。またねっ、ルーナ』

「うん。またね、ウイズ」

気がつくともルーナは召喚石の前に立っていた。

「あっ、戻って来たんだねルーナ。」

「うん。ただいまレイン。」

「どうだった？」

「無事契約出来たよ。これが契約の証の天杖・エアグルーヴだよ。」

「ルーナは僕に契約の証を見せてくれた。」

「綺麗だね。」

「うん。」

「次、レイン「スレイブ」

「呼ばれたよ、次はレインの番だよ。頑張つて。」

ルーナと話しているとレインの名前が呼ばれた。

「うん。行ってくるよ。」

レインは召喚石に魔力を流した。

「召喚の間・レイン side」

「此処が召喚の間か。」

『お待ちしておりました、マスター。』

「アナタは？」

レインの目の前に、七色の髪を腰まで伸ばした、美しい女性が立つ

ていた。

『私は精霊王フィル。貴方をお待ちしておりました。』

「僕を待っていた？それに精霊王って・・・」

『文字道理、私は世界中にいる精霊達を統べる王の位にあります。そして、マスターにはマスターにしかできない使命があります。そのためマスターは目覚め、私が遣わされたのです。』

「僕の使命とは何ですか？」

『今はまだ話せません。今以上の力を付け、真の力に目覚めた時、全てをお話します。』

「・・・解りました。」

考えこみながら、頷くレイン。

『では、契約致しましょう。精霊王フィルの名において、レイン
Ⅱスレイブと契約し、契約の証として精霊剣オウル・クリティアと、
我が身と心の全てを捧げる。汝は我を受け入れるか。』

「はい。」

『これにて契約は成った。これからよろしくお願い致します、マスター。』

「よろしく、フィル。」

レインが答えると、フィルがいきなりレインに抱きつきキスをする。動揺するレインに対してフィルはレインの口内に舌を滑らせ、絡ませる。

1分間のかなり濃厚なキスを済ませ、フィルはレインから離れると、銀色の橋が一瞬架かり消えていった。

『フフっ、これはマスターに身も心も捧げる証です。こういうことをしたいときはいつでも言うてくださいね、マスター。これ以上の行為でも、マスターなら私はしても良いと思っていますから。』

顔を赤らめつつも妖艶に笑いながら言うフィルに、レインは呆然として何も言えなかった。

「それでこれからどうするんだ？」

レインが1時間かけて正気に戻り、それでも顔は赤かったが、フ

イルに訪ねた。

『とりあえずマスターに掛かっていた魔力の枷をさつきキスで外しましたから、契約も相まって魔力がかなり高まったはずです。』

「サクラさんの枷を外しても大丈夫なのか？」

再び顔を赤らめつつも質問するレイン。

『ええ、私と契約したことで魔力に対する抗生も高まりましたから。問題無いでしょう。』

「じゃあ契約も済んだし戻ろう。」

『はい、マスター。』

そう言つとフィルはレインの腕に抱きつき、『転位』と言葉を放った。

フィルに抱きつかれながらレインが召喚石の前に現れると、ルーナが駆け寄ってきた。

「レイン。そちらの女性はどなた？」

顔には可愛らしい微笑みを浮かべ、口調は丁寧ながらも目が全く笑っていないルーナに問い詰められ、レインはしどろもどろになりながらも答えた。

「え〜っと、彼女は、僕の召喚獣で、精霊達の王、精霊王フィルだよ。」

「うつ、嘘。精霊達の王なんて・・・」

「本当だつてば、信じてよルーナ。」

「う〜、まあレインが嘘をつくとは思わないし、信じるけど・・・、なんで召喚獣が契約してすぐ、しかもレインにだっ、抱きついて現れるのよ。」

『それは・・・やっぱりマスターに身も心も捧げたからじゃないでしょうか？』

「みっ身も心もって、レイ〜ン〜。」

「ヒィッ」

地獄の底から響くような声でレインを問い詰めるルーナ。
ルーナの尋問は試験が終了し、午後の入学式の開場まで続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1954y/>

召喚師

2011年11月17日21時30分発行